美学の周辺題材における〈見る〉〈見られる〉

オーガナイザ
福 島 宙 輝　　（神戸大学　DX・情報統括本部 / システム情報学研究科）

登壇者
浅 野　将 秀　　（神戸大学　高等教育推進機構教養教育院）
宇 野　佑　　（無所属）
古 屋　有 紀 子（千葉大学大学院　情報・データサイエンス学府）

企画の趣旨

本ワークショップでは、美学においてこれまで十分に論じられてこなかった即興演劇・飲食・バーテンダーの実践などを題材として、演じる側、見られる側、見る側（観客）、いわゆる「素人」がどのように関係し合い、いかにして芸術や美的経験を共同で構成しているかを議論する場を設けたい。

提題者の専門は認知科学（福島・古屋）と哲学（浅野・宇野）であり、それぞれが日々の研究や実践のなかで「これも美的経験ではないか」と感じてきた題材を持ち寄る。ファインアートを中心として展開してきた従来の美学・哲学では周辺的とみなされがちなトピックを取り上げ、制作者と鑑賞者の関係性を軸として複数の事例を横断的に比較・考察する。

福島の発表は味覚・嗅覚を軸とした美的経験を論じ、食べ手が食べる順序・速度・咀嚼の仕方によって作品の経験的構造そのものを変容させうることを示す。料理は提供時点で完結せず、受容行為のなかで（再）構成されつづけるという立場から、「味わうこと」が制作・演奏・パフォーマンスといった概念といかなる関係を結ぶかを問う。**浅野**の発表は「素人」に焦点を当て、守破離という修養論を補助線に、鑑賞における「型」の習得過程を検討する。玄人から提示された細部への注目が素人の鑑賞をどう方向づけ、またどのような取り違えを生むかを論じながら、哲学者が理想とする「素人性」の意味を問い直す。**古屋**の発表は即興演技の行動観察実験をもとに、Peirce 記号論の枠組みから演者の推論プロセスを分析する。「役のように見える」という制約（habit）が推論を加速させ、そこからの逸脱（受動的なずれ／能動的なずれ）が Peirce 美学における Firstness―まだ概念に分節化されていない質的で直接的な感覚経験―の出現条件となることを論じ、「見る」「見られる」の相互行為のなかで美的経験がいかに生成されるかを考察する。**宇野**の発表はバーテンダーの調酒行為を取り上げ、カウンター越しの客との相互行為のなかで生じるフロー体験を日常性の美学との関連から位置づけ、その美的経験の独自性を検討する。

これらの事例に通底するのは、美的経験が一方向的な受容ではなく、演者・作者・鑑賞者・素人が相互に関与し合う動的なプロセスとして成立するのではないか、という問いである。本ワークショップはこの問いを共有の出発点として、〈見る〉／〈見られる〉という関係が各事例においてどのような形をとるかを比較しながら議論を深めたい。

提題者のうち 3 名は科学基礎論学会での発表が初めてであり、各々の中心的専門領域外からの参入となるが、本ワークショップを通じて学会聴衆との活発な交流が生まれることを期待している。

ワークショップは、各提題者による 20 分程度の個別発表を中心とし、その後に十分な質疑応答とフロアディスカッションの時間を設ける予定である。

味・香りにおける鑑賞者と制作者について

福 島　宙 輝（Hiroki Fxyma）

神戸大学　DX・情報統括本部 / システム情報学研究科

味覚・嗅覚を基軸感覚とする美的体験は、絵画・音楽・文学といった既存の芸術ジャンルの枠組みや、理論の横流しでは十分に説明しきれない側面をもつ。本発表では、制作者と鑑賞者の関係に焦点を当て、飲食における美的経験の独自性を検討してみたい。

一般に芸術作品は「作者 ― 作品（テクスト）― 受容者」という構図のもとで論じられてきた。絵画では画家が制作した作品を観者が鑑賞し、音楽では作曲家による楽曲（スコア）を演奏者がパフォーマンスによって表現し、聴衆が受容する。文学においても、読者はテクストを解釈するが、その物理的内容（文字、文章）を書き換える権限までは通常もたない。機械の仲介を含む翻訳の可能性や、テクスト解釈の多様性は当然存在するが、作品の同一性、すなわち異なる人が「同じものをみた」といえる性質のようなものはある程度保持されていると思う。

しかし、料理を中心とする飲食経験はこの構図に必ずしも収まらない。一皿の作品にレシピ考案者、生産者、料理人、提供者が関与するとしても、最終的な経験の成立には食べ手の積極的な介入が不可欠である。上にぎり寿司の食べる順序を変える、パスタに調味料を追加する、石焼ビビンバを混ぜる、温度の変化を待つ（舌は温度帯によって感じやすい味が変化する）、他者と取り分けるといった食事行為、共食行為によって、作品の経験的構造そのものが容易に変容しうる。たとえばカツカレーを食べる際に、カツから食べるのか、ルーから食べるのか、すべてを混ぜるのかによって、知覚される風味の時間的構造は変化するが、料理人はその順序を完全には統制できない（食べることの時間的性質については 2024 年の拙稿を参照）。最悪の場合、「ちょっと頂戴」「ひと口あげるね」などという不埒な輩によって、パティシエの作品であるパフェのストーリーに全く別の作品のダイジェストがカットインしてくることもある。

作品の経験において受容者側の持ち分が大きいという構図は、受容者の身体条件に強く依存することを考えると一層深刻である。空腹状態、体調、文化的背景、過去の食経験、アレルギーや嗅覚障害の有無、味が立ち現れる空間としての口腔容積の個人差などによって、同一の料理が心理的のみならず物理的にも、化学的にもまったく異なる経験として立ち現れる。サバの味噌煮がいかに高度に美的な料理であったとしても、サバアレルギーをもつ人にとっては受容そのものが不可能である。ここでは受容以前に、身体的制約が作品の成立を規定している。

このように、味においては「客観的で普遍的な美的性質が経験に先立って料理に内在する」とは考えにくいのではないかというのが、「みる・みられる」をテーマとした本ワークショップでまず検討したいことである。

加えて検討したいことは、この味覚・嗅覚の特性を検討していく中で生じてきた、幾分雑駁ないくつかの疑問点についてである。「味わうこと」は、制作・演奏・パフォー

マンス・表現といった芸術にまつわる諸概念とどのような関係を結ぶのか。食べ手が担う「演奏」的側面（食べる順序や速度、咀嚼）、咀嚼やテイスティングにおける「わざ」はパフォーマンスとして、鑑賞者でありながら作品の表現主体となりうるのかを検討したい。そこでは、食べる人を最終的な作品の制作者に組み込んで、「食べられるまで料理は料理ではない」とまで言えるかといったことや、さらには食べることは作品の破壊か、といった問いも視野に入れたい。

現段階では、筆者自身は食べること、飲むことは作品の「受容」であると同時に「（再）構成」でもあると主張してみたいと思っている。受容者は作品の最終的な意味づけだけでなく、経験の物質的・時間的構成にも参与する。他ジャンルと比べて受容者側の決定権が大きく、作品は提供時点で完結せず、食べる行為のなかで（用語が適切かはわからないが）構成されつづけるのだと考えている。すなわち、味わうこと、嗅ぐことにおいては演奏やパフォーマンスが一定程度受容者側に委ねられ、舌や口腔、鼻腔がパフォーマンスのステージとなりうるのではないかと考えたい。本発表は、こうした飲食における制作者と鑑賞者の関係性の特異性を提示することで、ワークショップ全体の〈みる〉／〈みられる〉をめぐる議論への素材を提供する。

References

Fxyma, Hiroki. “The Temporality of the Aesthetic Appreciation of Food and Beverages.” Contemporary Aesthetics 22 (2024). https://contempaesthetics.org/2024/09/10/the-temporality-of-the-aesthetic-appreciation-of-food-and-beverages/

素人をめぐるいくつかの試論

浅 野　将 秀（Masahide Asano）

神戸大学　高等教育推進機構 教養教育院

本発表では、美学の非専門家の立場から、鑑賞における「素人」という存在について、いくらかの話題提供をおこなうことを目的とする。

素人と玄人の鑑賞の差異は、しばしば対象の見え方の違いとして説明される。たとえば、野球の試合の一場面は、たんなる身体運動の連鎖としても、試合展開を左右する高度な駆け引きとしても立ち現れる。同様に一枚の絵画も、平面的な色の配置であると同時に、必ずしも目に見えない作者の思想や感情の表出としても見られうる。実際、熟達した解説者の語りは、鑑賞の対象に馴染みのない視聴者の注意を向けかえることで、それまで見えていなかった動きや表情を意味あるものとして前景化させる。こうした誘導は、事実の伝達というよりは、世界の映り方そのものの変容を促す営みといえるだろう。本発表では、日本の伝統的な修養論である「守破離」を補助線にしながら、こうした世界の捉え方を習得し、変容させていく過程を中心に検討したい。

まず検討したいのが、こうした見るための「型」とでも言うべきものが、その習得の初期段階において、どのように提示され、またどのように理解されるか、という問題である。鑑賞において新しい見方を立ち上げるために、玄人は具体的な指示をともなう形で細部への注目を促すことがある。たとえば、絵画をそこに描かれた風景としてしか見ていない者に対し、あえて絵具の盛り上がりや筆使いの方向に注目させることで、画家の流派や制作の背景という新たな観点を開いたり、同様に、野球観戦において打球の行方ではなく外野手の守備位置や足の運びに目を向けさせることで、守備の戦略的側面に気づかせたりすることがある。

しかし、型の習得において、こうした細部への注目はある種の転倒を生じさせうる。本来、上述のような指示は、より自由で豊かな鑑賞へと至るための暫定的な装置に過ぎない。ところが素人は、玄人から提示された細部そのものを、収集すべきデータや守るべき規範として受け取ってしまう。こうして素人は細部を注視していることが正しい鑑賞の証拠であると思い込むようになる。本発表では、「守」の段階で生じがちなこの過程において素人は何を取り違えているのか、そもそも型の習得において細部への着目がなぜ、どのように関わってくるのか、といったことについて考えてみたい。

最後に、時間が許せば、哲学者と素人性をめぐる問題についても考えてみたい。哲学者は専門化・細分化された知に抗する者として素人であらねばならないと言われることがある。こうした謂れの真偽は措くとしても、ここで理想とされる素人性とは、結局のところ、端的な無知でも既存の型を文字通りに信じ込むことでもないだろう。むしろ、それらを経て型から離れた、つまり型を血肉化した上でそこから自由になる玄人の境地、すなわち「離」の状態を指しているのではないか。本発表では、以上のような問いを入り口として、鑑賞における素人の問題について参加者諸氏と共に議論を深めたい。

バーテンダーはどのような美的経験を味わうか

宇野佑

無所属

本発表は、バーテンダーがカクテルを作成する際に経験する美的経験を、作り手の視点から考察することを目的とする。

カクテルはバーテンダーがゲストのオーダーに応じて作る、そのとき、その場限りでのハレの食事の一種である。バーテンダーはその作成において、ベーススピリッツやフレッシュジュースといった素材の選択と組み合わせ、温度管理、味のバランス調整、グラスやガーニッシュの選択など、複合的な知識と技術を活かしつつ感性を最大限に発揮する。

こうした実践を考察するための理論的枠組みとして、本発表はまず美学者Yuriko Saitoが提唱する「することの美的次元（the aesthetic dimension of doing）」を援用する。この概念は、伝統的な美学が中心に置いてきた鑑賞者の受動的経験ではなく、作り手・行為者の能動的実践における美的経験に焦点を当てるものであり、カクテル作成という身体的・感覚的実践を記述する上で有効な視座を提供する。

次に、その実践がいかなる質の経験なのかを分析するため、心理学者チクセントミハイのフロー（flow）概念を補助的な分析枠組みとして用いる。フローを伴う行為は「一つの活動に深く没入しているので他の何ものも問題とならなくなる状態, その経験それ自体が非常に楽しいので, 純粋にそれをするということのために, 多くの時間や労力を費やす状態」として特徴づけられる。バーテンダーがカクテル作成において達成するフローは、Saitoの言う「することの美的次元」が現象として具現化した事例として捉えることができると考える。

以上の考察を踏まえ、本発表では最終的に、作り手の側の美的経験（フローを伴う制作）と受け手の側の美的経験（ゲストによるカクテルの享受）の間にいかなる構造的関係が成立するかという問いを提起し、参加者との議論の糸口としたい。

参考文献

Alex Day et.al. (2018).*Cocktail Codex: Fundamentals, Formulas, Evolutions*, Ten Speed Press.

Mihaly Csikszentmihalyi. (1990). *Flow : The Psychology of Optimal Experience*, Harper.
邦訳 今村浩明訳.(1996).『フロー体験 喜びの現象学』, 世界思想社.

Yuriko Saito.(2025).Aesthetics of the Everyday.
https://plato.stanford.edu/entries/aesthetics-of-everyday/

佐々木倫子. (2005).『Heaven』(4), 小学館.

南雲主于三.(2019).『ザ・ミクソロジー:カクテル創作のメソッドとテクニック』,柴田書店.

縛られること，はみ出すこと

「演じる」ことにみられる制約と Firstness

古 屋　有 紀 子　（Yukiko Furuya）

千葉大学大学院　情報・データサイエンス学府　博士課程 2 年

私たちは誰かと対話するとき，相手の意図を推測し，場にふさわしい振る舞いを選んでいる．たとえば私は先生の前では学生のように振る舞うし，きょうだいの前では姉のように振る舞う．即興演技のような「演じる」ことが意識される場面では，この傾向は際立つ．演者は「役のように見えているだろうか」という意識に常に駆り立てられ，相手の言動をどう解釈し，自分がどう応じるかを絶えず調整する．Foucault（1975）がパノプティコン論において描いたように，外的な監視のまなざしは主体に内面化され，主体自身の規律として作動する．対話の場においても，「他者からどう見られるか」という想像上のまなざしが演者の内に立ち上がり，推論の方向を規制している．こうした内面化された制約は，Peirce の用語で言えば habit―推論をあらかじめ枠づける規範的制約―として位置づけることができる．ただしこの制約は推論を停止させるのではなく，むしろ特定の方向へと推論を導くチャネルとして機能する．

この制約の機能は単に推論の抑制ではなく，推論の方向性の決定の基準になりうる．創造性研究においては，制約が探索空間を限定することで思考を「最小抵抗の道」から逸脱させ，かえって独創的な解の生成を促すことが広く報告されている（Stokes, 2006; Acar et al., 2019）．俳句における五七五の型がかえって豊かな表現を可能にするように，「役のように見える」という制約は，演者の推論に方向と緊張を与え，状況が変化するたびに新たな仮説の生成を駆動しているのである．

筆者は大学生を対象とした即興演技の行動観察実験を実施し，このような仮説変化のプロセスを Peirce 記号論の枠組みから分析した．その結果，解釈の「ずれ」に二つの様態があることが明らかになった．一つは，対話の積み重ねのなかで双方の解釈が知らず知らずのうちに乖離していく受動的なずれ（passive gap）．もう一つは，演者自身が意図的に解釈の枠組みを切り替え，新たな仮説を立ち上げる能動的なずれ（active gap）である．Gadamer（1960）の地平融合の観点からすれば，この「ずれ」とは，二人の演者の地平が予期せぬ仕方で交差し，既存の理解の枠組みが再編を迫られる事態にほかならない．いずれの場合も，「役のように見える」という制約が前提として存在しているからこそ，その制約と状況のあいだに生じた齟齬が，推論を加速させ，新たな abduction（仮説生成）を創発させている．

ここで問いとなるのは，この創造的な逸脱の経験が，美的経験とどのような関係にあるのかということである．Peirce の美学（esthetics）は，美を「理由なく客観的に賞賛に値するもの」（CP 1.191）として捉え，その本質を Firstness―まだ概念に分節化され

ていない, 質的で直接的な感覚経験―に見出した. habit が安定的に機能している限り, 推論は既知の枠組みのなかで淡々と進行し，Firstness は背景に退いている．だが，制約と状況のあいだの齟齬によって habit が揺さぶられ, 演者がまだ名づけられていない驚きや違和感, あるいは予期せぬ共鳴に直面するとき, そこに Firstness が立ち現れる．Ibri（2015）は芸術家の営みを「把握しえないものを捉え，それを合理的にする」ことと特徴づけたが，この理論的視座に立てば，即興演技者もまた，制約がもたらすずれの只中でこの営みを遂行していると言えよう．

以上の背景を踏まえ，本発表では以下の二点を提示する．第一に，「役のように見える」という制約がいかにして推論を加速させ，同時にそこからの創造的逸脱（受動的なずれ／能動的なずれ）を生み出すかを，実験データに基づいて示すこと．第二に，この制約に駆動された逸脱こそが Peirce 美学における Firstness の出現条件であることを論じ,「見る」「見られる」の相互行為のなかで美的経験がいかにして生成されるかを考察することである．

References

- Peirce, C.S. Collected Papers, vols. 1–8, Harvard University Press, 1931–1958.
- Foucault, M.（1975=1977）『監獄の誕生―監視と処罰』田村俶訳，新潮社
- Gadamer, H.-G. Wahrheit und Methode, J.C.B. Mohr, 1960.（邦訳 :『真理と方法』法政大学出版局, 2008.）
- Ibri, I.A. "Peirce's Cosmology as Metaphysical Ground for an Aesthetic Transcendentalism," Cognitio, 2015.
- Stokes, P.D. Creativity from Constraints: The Psychology of Breakthrough, Springer, 2006.
- Acar, O.A. et al. "Creativity and Innovation under Constraints," Journal of Management, 45(1), 2019.